

詩篇 第107篇 19～22節  
マタイによる福音書 第8章 5～17節

説教 岡村 恒 牧師

「ただ、お言葉を下さい」(8節)主イエス・キリストに力あるただ一つの言葉を求める人物が登場します。神に選ばれた民でない百卒長でした。ユダヤ人社会では異例中の異例です。彼は軍隊で百人の兵を率いる司令官でした。ガリラヤ湖畔の中心地カペナウムも、この軍隊の駐屯地でした。本来なら自分たちが支配しているユダヤ人を呼びつけて命令するのが当然でした。しかしこの日、百卒長はわざわざ自分から主イエスのもとへ来て、「主よ、私の僕が中風でひどく苦しんで、家で寝ています」(6節)と言い、それに対して「わたしが行ってなおしてあげよう」(9節)と主イエス・キリストの方から申し出られました。

神ご自身から踏み込んで下さる、これがまことの神の姿です。どこか遠くで冷淡に見ている方ではないのです。百卒長は主イエス・キリストの申し出に心を動かされましたが、彼独特の言い方でお断りをしました。「主よ、わたしの屋根の下にあなたをお入れする資格は、わたしにはございません」(8節)。罪の赦しの洗礼が執行される時、この百卒長の言葉が響きます。百卒長は主イエス・キリストが何者で、神とどういう関係にあるか、そして自分はいったい何者かを知っていました。ユダヤ人でありませぬでしたがユダヤ教に関心を持ち、まことの神に心を向ける人でした。自分はいったい何者か、選ばれた民に属さず、神に『あなたは私の子だ』と呼ばれる場所から遠く離れていることを知っていたのです。

「ただ、お言葉を下さい」(8節)この言葉は切実な願いでした。『行け』、『来い』などの命令の言葉を越えた本当の言葉を、彼は主イエス・キリストに望みました。力ある本当の言葉を私に下さい、そうすれば、しもべも癒され、私も深い悲しみから解放されます。

私たちも彼と同じように、本当の言葉を必要としています。その一言を聞かなければ一歩も前へ進めない、確かな言葉が必要なのです。聖書は、その一言を聞くために生きたらよい、そう語ります。私たちは今日、この場所に、百卒長と同じ姿で集められました。主イエス・キリストの口から出る言葉を聞き取る、それが唯一

の目的です。その言葉を聞けば命を得る、ここからまた日常へ歩みだすことができるのです。

私たちは、神が私たちのことを心にとめて下さるような理由など何一つ持たない者でありながら、一方的に神は愛し、神のものとして取り戻して下さる。聖書ははっきりとそう記します。洗礼を受ける者は、主イエスの贖(あがな)いを信じて、洗礼を受けることを願い出ます。「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」(マタイによる福音書 7章7節)。山上の説教で主イエスはそう言われました。その主イエスの招きに応えるようにして、百卒長は求めたのです。「ただ、お言葉を下さい」この一言に信仰のありったけを込めて、彼は主に求めました。

この百卒長が体験したことは、礼拝のたびにこの場所で、世界中で起こっています。私たちの目の前に今、主イエスはおられません。肉体を持った主イエスが私たちに手を触れて、祈って下さることはできません。その必要がないからです。あの日、百卒長のしもべが癒されたように、主は遠く離れているように見えても、悲しむ者、疲れた者、重荷を負って苦労しているものにその力を発揮して癒して下さるのです。

この日、百卒長のしもべはこのようにして癒されました。主イエス・キリストが、神の子として生きることが出来る者として私たちを回復し、癒して下さっています。誰でも、主イエスの言葉を信じる者に、神はもれなく命を与えて下さいます。主イエス・キリストは、私たちに命を与える為に来て下さいました。私たちは、その知らせを聞いて「ただ、お言葉を下さい」そう願い求めればいいのです。

私たちは、他の兄弟姉妹と共に聞き取った救い主イエス・キリストの言葉を反芻するように歩みます。主イエス・キリストは、私たちが神を信じ、主イエスを信じて生きるようにと、この瞬間も私たち一人一人を招いておられます。主の前に歩み出て、「ただ、お言葉を下さい」そう願い求めるだけでよい、主はその祈りに応え、私たちに命を与えて下さいます。

(記 説教要約奉仕者)